

早良組関東在住門信徒のつどい

令和元年6月29日(土)築地本願寺におきまして、第2回早良組関東在住門信徒のつどいを開催させていただきました。門信徒60名・法中19名と前回の約2倍のご参加をいただき、講堂全体が多くの笑顔で満たされる中での開式となりました。

今回はご法話のあと、一人一人形芝居の安藤秀明氏による「弁円の涙」を上演していただきました。

懇親会では、現在のお寺の様子や福岡で流れていた懐かしいコーシヤルを交えた映像を流しながら、久しぶりに会うご住職とご門徒の皆さん、それぞれにゆつくりと温かい時間を過ごしていただきました。

福岡と関東では距離にすれば遠く離れてはいますが、お念仏申す私たちは同じ阿弥陀さまの前に座らせていただいています。お念仏を慶ぶたくさんの御同朋(仲間)とお会いできましたこ

と、まことに有り難い事でした。この度のつどいにご参加頂きました皆様には、ますますお念仏のご縁に遇われますよう念願致します。

合 掌
早良組副組長 小林浩城



花尾念仏洞

早良組
だより



かくれ念仏

平成30年度 スタンプリー 表彰式

6月4日(火)重留の真正寺様にて早良組スタンプリーの表彰式を執り行いました。表彰者は左記の皆様です。

勤行の後に、30ヶ寺以上参拝の方に表彰状と記念品を、10ヶ寺以上参拝の方には記念品を贈呈いたしました。真教寺ご住職のご法話をお聞かせいただいた後、茶話会の際に皆様より



三言ずつお話をいただきました。

「今までお参りしたことがなかったお寺に行けた」、「お寺によっておつとめや作法の違いがあった」、「たくさん参拝させていただくには体力も必要でした」など、様々なご意見ご感想をいただきましたが、多くの方に次回も参加したいとおっしゃっていただきました。

おかげさまで、昨年度で3年目をむかえました早良組スタンプリー。3年続けてご参加いただいている方、また昨年度からご参加いただいている方、多くの方が今まで以上にお聴聞のご縁を結んでくださっていることを嬉しく思います。

ご参加いただきました皆様、またご協力いただきました各寺院の皆様、本当にありがとうございます。本年度も開催予定ですので、皆様のご参加とご協力をよろしくお願いいたします。

■30ヶ寺以上の参拝者		
嶋田	厚枝様 (西光寺)	33
松崎	純子様 (万徳寺)	33
村松	忍様 (明性寺)	33
尾中	照子様 (西教寺)	33
■10ヶ寺以上の参拝者		
三	淳一様 (真教寺)	19
苦本	朝子様 (教善寺)	15
松永	清光様 (万正寺)	14
柳口	鋭代様 (西応寺)	12
溝藤	令子様 (真正寺)	12
斎村	涉子様 (明性寺)	10
吉村	孝子様 (西応寺)	10
樋口	卓子様 (西応寺)	10
正崎	朋子様 (西教寺)	10

かくれ念仏とは

この度の早良組だよりは薩摩を中心に約300年にもわたる念仏禁制が行われた「かくれ念仏」について特集いたしました。令和の今、信教の自由は憲法で保障されていますが、今からわずか140年前まで人吉・薩摩の地では浄土真宗が禁止されていました。

念仏禁制が始まったのは、人吉藩が1555(弘治2元)年、相良晴広によって、薩摩藩は1597(慶長2)年、島津義弘によって正式に真宗が禁止されました。

全国的に見ても、真宗を禁止した藩はこの二藩だけです。なぜこんなことが行われたのでしょうか。

諸説ありますが、「阿弥陀如来の前では、生きとし生けるものすべての命は尊い」という浄土真宗の教えが人吉藩・薩摩藩の支配体制にそぐわなかったこと。また一向宗信者の結束による行動が、加賀で行われた一向一揆のように発展する危険があったことなどが挙げられ



ます。いずれにしても藩の体制を守るための弾圧であったことに間違いはないでしょう。その弾圧は凄惨なもので、今でもその悲話は語り継がれています。自由にお念仏が出来ない民衆は、講という集まりを作り、ひそかに山の中や洞穴などでお念仏の灯を守っていたのです。

そんな名もなき方々が守り、慶ばれた世界を訪ねてみます。

かくれ念仏年表

室町	
1506（永正3）年	本願寺より薩摩国千野湊（現串間市）の釋明心に本尊を下附される。
1555（弘治元）年	肥後人吉藩、真宗を禁止する。
安土桃山	
1577（天正5）年	島津義久、薩摩・大隅・日向を統一する。
1594（文禄3）年	佐土原藩内数名が真宗を信仰しない旨を誓約する。
1595（文禄4）年	島津家家臣・伊集院幸侃、庄内を封する。
1597（慶長2）年	2月22日、島津義弘、真宗禁止令を発布する。
1599（慶長4）年	島津氏家臣団、真宗を信仰しない旨を起請する。
江戸	
1624（寛永元）年	島津家久、キリスト教と共に真宗禁止の法度を定める。（弾圧の制度化）
1649（慶安2）年	島津光久、京都伏見で東西本願寺の表敬訪問の使者を謝絶する。 以降、島津氏と両本願寺の交流が途絶える。
1655（明暦元）年	薩摩の一向宗統領・宮原真宅、磔殺される。（真宗信者極刑の初見）
1694（元禄7）年	本願寺、薩州内場煙草講に親鸞御影を下附する。（講名の初見）
1709（宝永6）年	真宗信者に自首を勧める。自首者数千人に及ぶ。
1710（宝永7）年	薩摩藩、幕府巡見使に薩摩の一向宗は上方の宗旨とは異なると回答する。
1768（明和5）年	真宗信者が自首すればその科を免ずることを布達する。 五人組で真宗信者を相互監視するように布達する。
1776（安永5）年	真宗取締りにあたり、訴人（密告）制度をとり、密告者は褒賞する旨を布達する。
1827（文政10）年	早良・浄泉寺曇冥、薩摩に潜入し、諸講を巡回布教する。
1835（天保6）年	「本願寺財政改革上納帳」発覚により、弾圧が更に激しくなる。（天保の大弾圧）
1843（天保14）年	摘発された本尊2千幅、門徒14万人にのぼる。
1857（安政4）年	使僧として入薩した安芸国真徳寺の釋無涯、役人に追われて日向本庄の宗久寺で自決する。
明治	
1868（明治元）年	「神仏分離令」発布。廃仏毀釈が始まり、藩内1066ヶ寺の廃絶を断行する。
1873（明治6）年	明如上人、御消息にて真宗解禁に近い旨を伝える。
1876（明治9）年	9月5日、鹿児島参事・田畑常秋、「信教自由の令」を布告する。（真宗の解禁）
1877（明治10）年	紀州性応寺の本堂などを鹿児島別院に移設する。
1878（明治11）年	別院用地2295坪買収。10月鹿児島別院本堂落成。



念仏者の取締りは徹底して行われ、藩は春と秋に「宗門改め」（民衆の信仰する宗教を調査する制度）を行い、お寺からは「寺請証文」、村からは「証文」を提出させ、念仏組からは「証文」を提出させ、念仏の教えを信仰していると分かる と捕らえられ、拷問（割った木の上に正座をさせられ、300キロ程の石をのせられ、棒で打たれる等）にかけられました。また改宗の意思がないものは斬首・磔・火あぶりなど極刑に処されました。しかし人々はこの拷問に耐えてゆきました。なぜ反乱も起こさずひたすらに耐え抜いたのでしょうか。

都城・安楽寺の佐々木芳麿住職

はこう語られます。「よくよく念仏そしらんひとを、たすかれとおぼしめして、念仏しあはせたまふべく候」と親鸞聖人はお示しです。親鸞聖人が慶ばれた世界は「生きとし生けるものは世々生々の父母兄弟なり」のお心であります。迫害を加える人は敵じゃない。まだ念仏のご縁に恵まれない気の毒な人たちです。その人たちも仏法のご縁に恵まれてくださるよう願ってあげてください。そんな徹底した平和主義・非暴力の世界を生きておられたのではないかと。

民衆は役人に見つからないよう、浄土真宗の教えを替え歌にして、田植えや稲刈りの時に歌っていたそうです。絶望であればあるほど、阿弥陀様のお慈悲が響いたのでしょう。ただひたすらに耐えて守り抜いた歴史が「かくれ念仏」なのです。

明治9年、晴れて「信教自由の令」が布告されます。地下水脈のように張り巡らしてあったお念仏の教えが日の目を見たとき、薩摩の地は浄土真宗一色に染まりました。

かくれ念仏マップ



- ※ ●印は主な「かくれ念仏洞」を示す
- ※ 旧人吉藩領
- ※ 旧薩摩藩領



- ① 花尾念仏洞（鹿児島市花尾町）
- ② 雀ヶ宮のかくれ念仏洞穴（鹿児島市吉野町）
- ③ 都迫かくれ念仏洞（鹿児島市本名町都迫）
- ④ 田島かくれ念仏洞（宮崎県都城市山之口町）
- ⑤ 田辺かくれ念仏洞（宮崎県都城市有水地区）
- ⑥ 本願寺鹿児島別院（鹿児島市東千石町）
- ⑦ 安楽寺（宮崎県都城市山之口町）
- ⑧ 本願寺人吉別院（熊本県人吉市七日町）
- ⑨ 覺照寺（鹿児島県曾於市岩川）
- ⑩ 源光寺（熊本県水俣市浜町）



隠して 守った 御本尊

8 まないた念仏 (人吉別院蔵)



まな板に隠した御本尊

8 傘佛 (人吉別院蔵)



傘に隠した御本尊

9 懷中本尊

(覺照寺蔵 鹿児島県曾於市)

大きさ1cmほどの非常に小さな懷中本尊(阿弥陀如来)。曾於市大隅町岩川の覺照寺を開いた平島義山師が禁制中密かに鹿児島入りした際に所持していたもの。



6 涙石 (鹿児島別院蔵)

念仏禁制時代、拷問に使われた石とされ、いつどのように伝わったかは定かではないが、過酷な弾圧の歴史を物語るように別院の境内に静かにたたずんでいる。

7

拷問石

(安楽寺蔵・宮崎県都城市)

石抱きという拷問に使われた拷問石。特別に作られたものではなく、軒下周りに使う淵石や井戸の蓋など、ありあわせの石が使われた。



10 源光寺 (熊本県水俣市)

薩摩の門徒が越境し参詣したかくれ念仏ゆかりの寺。薩摩の人々は、薩摩藩の目をかいぐり、また着いた先の人吉・肥後の役人にも見つからぬよう、舟で源光寺の軒下まで越境し、命がけで参詣した。

薩摩の 人々を かくまった 部屋



薩摩部屋 (源光寺内)

源光寺本堂の内陣裏に作られた隠し部屋。法座の際、参詣者にまぎれて薩摩役人が薩摩門徒を取り締まっていたため、薩摩門徒はこの部屋で息をひそめ説法に耳を傾けた。近隣の寺院にも薩摩部屋があったとされるが、現存しているのは源光寺のみとなっている。



3

都迫かくれ念仏洞 (鹿児島市本名町都迫)



木々に覆われた崖の中腹にあり、外からはわかりにくくなっている。入り口は狭く、腰をかがめないと入れない。3mほど進むと右に折れ、狭い穴をさらに進むと、奥行き4m、幅2mほどの空間があり、天井には空気孔が開けられるなどの工夫がされている。



4

田島かくれ念仏洞 (宮崎県都城市山之口町)

念仏はいのちなり
念仏はまことなり
血吹き
涙あふる、
暗き世に
わが無碍光は
されど
その力にては
消えざりき



5 田辺かくれ念仏洞

(宮崎県都城市有水地区)



1 花尾念仏洞 (鹿児島市花尾町)

鹿児島市花尾町にあるかくれ念仏の洞穴。人の手によって掘られた洞穴ではなく、岩と岩の間にできた隙間に御本尊などの仏具を安置し、礼拝した天然の洞穴である。念仏洞へ通じる道の入り口には見張り所をつくり、見張り役を立てて、役人が来たら上にいる人たちに伝えたい。現在は参道や駐車場も整備され、参拝しやすい念仏洞となっている。



2 雀ヶ宮のかくれ念仏洞穴 (鹿児島市吉野町)

鹿児島市吉野町にあるかくれ念仏洞。道路から少し山を登ると2つの穴が見えてくる。穴の中は迷路のように掘られており、人が立って歩けるほどの広さがある。この洞穴は、三つに分かれていて、手前から偽装洞穴・修行洞穴・説教洞穴となっていて、修行洞穴・説教洞穴は16m30cmの間道でつながっている。説教洞穴には本尊棚があって、大変大掛かりな洞穴であったことがわかる。



伝助さん

人吉藩の「かくれ念仏」の殉教者として有名なのが、人吉藩山田村（現・熊本県球磨郡山江村）の伝助という人物です。

彼はいわゆる「毛坊主」といわれる存在で、普段は農業に従事しているものの、絶えず流浪しながら伝道布教を行う「半僧半俗」の身でありました。

伝助は志納金を京都の本願寺へ納めにいって帰る途中、役人に捕らえられてしまいます。捕らえられた伝助は牢獄に入れられたが、覚悟を決めていた伝助に悲しみの色はなく、静かに口にお念仏を称え、全てを白状し断罪が下るのを待っていました。

そんな伝助の姿に心打たれた役人たちは「転宗」をすすめ、仏像仏具を全て焼却したならば命は助けてやると伝えたのですが、伝助は「ご親切はありがたいですが、私は、もはやいくばくもない命。短いこの世に執着してご恩報謝のお念仏を止めようなどとは思ってもやらぬ事でございます。

私の称名念仏は弥陀のご方便によるもので、私一存の計らいではない、念仏を断ち仏像を焼いたところでは内心の信心を打ち消すことはできない。それでは公儀を偽り、かえって不敬の極みでありましょう」と答えました。

お念仏を口に称え、多くの人々に「二足先にお浄土の蓮台で待ち受け申す。たとい我が命は今ここで果てようとも往生成仏は疑いなし、今日この不思議なご縁によつて皆さんもどうか仏さまのご恩を慶んで下されよ」と言い残し山田川原の刑場にて打ち首となりました。享年六十歳。



伝助殉教の地

与内山の首塚

伝助は打ち首獄門の刑に処せられ、首は刑場前の獄門台にさらされました。しかし、その首を伝助の愛弟子であった秋山和七郎が盗み出し、この場所に埋葬したといいます。

役人がずっと見張っていたため、和七郎は処刑の六日後になつてやっと師匠・伝助の首に近づくことができました。その時すでに首が腐りかけていたので、和七郎は思わず獄門台に駆け上がり、師匠の首を抱えます。風呂敷もなにも持っていなかったため、着ていた着物の片袖をちぎって、それにくるんで盗みだしてきたといひます。



人吉市瓦屋町

伝助の遺歯

和七郎はその首を自分の地所に埋葬しました。同時に、師匠・伝助の首がここに埋めてあるという証として、その歯を二本抜いて遺髪とともに観音菩薩像の台座に隠したのです。これが秋山家に伝わる「伝助さんの歯」の由来であります。



人吉別院



人吉別院蔵

早良・浄泉寺秘話

「かくれ念仏」に関して、当時、特に警戒の厳しかった薩摩に潜入して、布教に募財にと活躍をした「曇溟」という方がいる。

この方は、資料には「筑前国早良郡樋井川村大字片江」とあり、現在の福岡市城南区片江にある、早良組内の「浄泉寺」の第九世住職である（現在の住職は第十七世）。

本願寺の使僧として、1827（文政10）年に薩摩に潜入したと思われる。浄泉寺には、曇溟が持っていた六字名号と、当時の日記帳がある。その日記帳は上下二部のもので、その上巻が残っている。福岡から薩摩に入国するまでに世話になった寺院の名前、訪れた講の名前がわかつている。まず博多萬行寺（福岡組）から熊本順正寺にあて、旅中不自由のないように依頼しており、順正寺に一泊、次に松橋の円光寺に一泊、松橋から乗船、海路にて水俣の西念寺に着く。順正寺の達書で津奈木光明寺・水俣西念寺・同源光寺・同



西方寺にあて、「浄泉寺が下向するので諸国諸講への取り持ちよろしく」と依頼している。そして、訪れた四十四の講の名前が、記されている。講名には、仏飯講・蠟燭講・燈明講などの本願寺へ送る物資の名前や、十六日講・二十五日講などの日にちのものがある。下巻に記されているであろう講の数を合わせると、七十を超える数であったらうと推測されている。布教するのも命がけ、聴聞するのも命がけであったとのことである。

本願寺「見残し石」

本願寺御影堂門石垣には、轡の定紋入（円に十の字の紋）の石がひとつあります。

まだ本願寺が大坂の石山にあった頃、薩摩の門信徒が寄進したその紋入りの石がたくさんあり、1580（天正8）年石山合戦の講和後に一旦薩摩へ持ち帰ったそうです。

そして本願寺が今の七条堀川の地へ寺基移転するに伴い、薩摩の門信徒が移転の手伝いをした



いとの思いから再び京都へ石を運び、石垣を築いたといひます。そして薩摩では念仏禁制が始まります。薩摩藩にこの石垣のことが知れると弾圧がより一層激しくなることを恐れ、この紋を削り取りました。しかし意図的にひとつだけ残し、九州の地では念仏禁制の弾圧にもめげず、み教えを守り伝えている人々がいることを全国の門信徒に広く示しました。そのまま残してしまうと危険なので、紋を傾け「×」印に残したというのがこの見残し石になります。